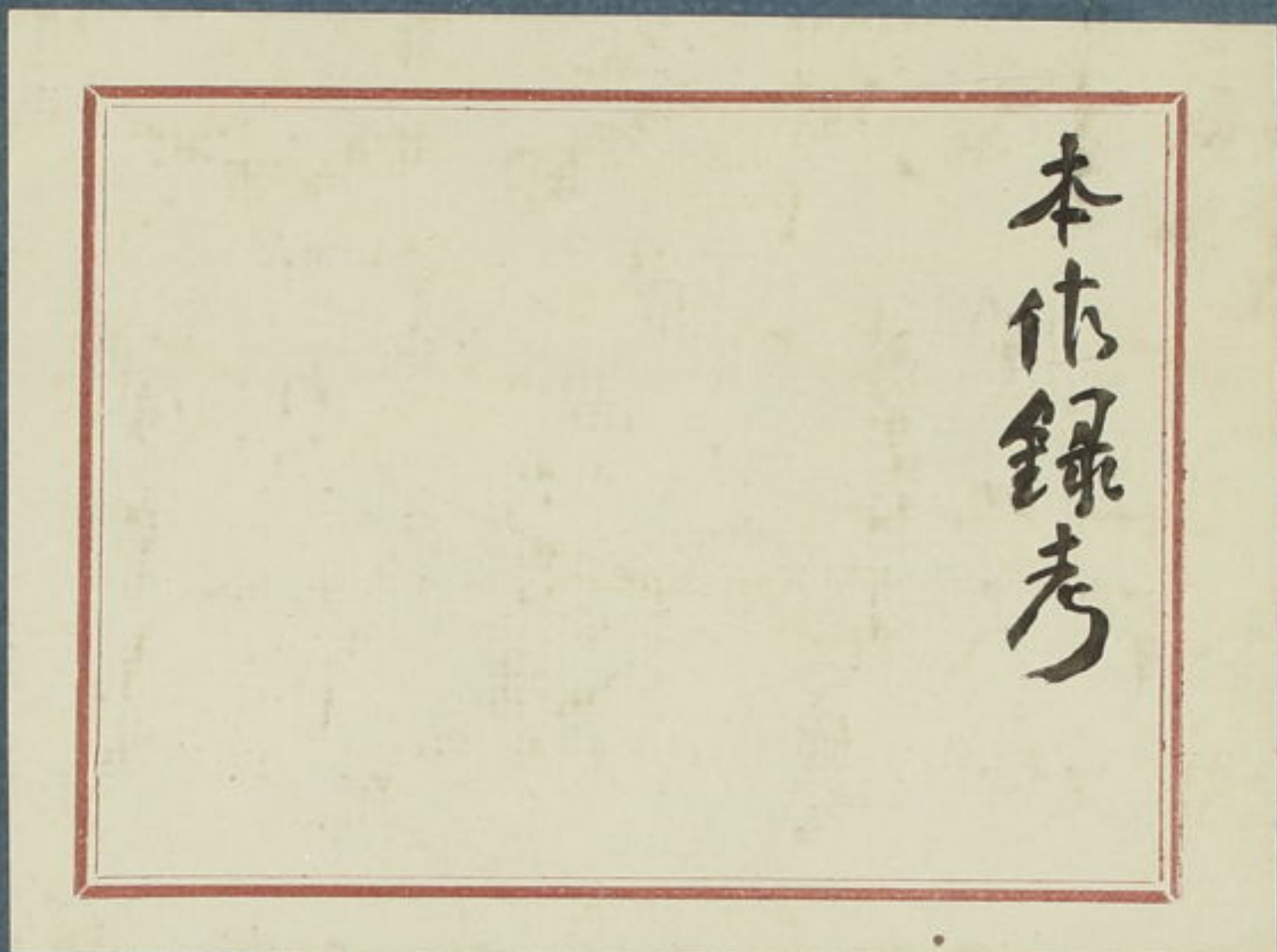




廣白石叢書

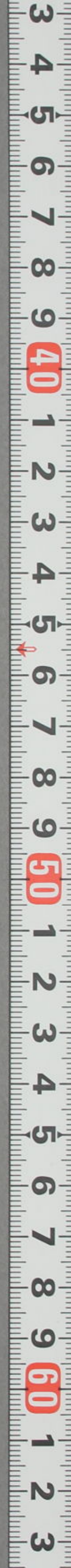


本作錄考



校

14
588
9



門 曾 4
番 588
卷 9

據ッテ校合ス



本依録考

一行ッテ

板倉家
文庫記



下は二

本依録の事についで、蓋其意同く、
毎件蓋その懼ろ事にあつては、
少る事、蓋其意同く、
を者此意言も採用、不足の、
慚愧不少

一、お房守の役者の、此類

多し事、此類

及重の、此類

お房守の、此類

門 曾
番 188
卷 9

内閣本ニ據ツテ校正ス



失、三行
本依録考

一行ッケ

板倉家
文庫記



下字ニ

本依録の事についで、
 毎件^盡その懼ろきにあつては、
 少なる事^等に於ては、其痛を不顧
 せしむる言も採用に足らざる憾愧不^少
 一お房舟の渡りの事、
 多し事、
 改重の事、
 御文、
 陣の内、
 にお房舟、
 いらし、
 くに注し、

曾門
588
卷 9



板倉家
文庫記

板倉家
文庫記



下は二

中依承の事についで、此書同く、答

毎作盡その懼ろ事にあつて、此類

ゆゑに、此類

を著し、此類

一、お房守の波ちのり、此類

多し、此類

波重のやうに、此類

お房守の書、此類

陣の内、此類

お房守の事、此類

お房守の事、此類

お房守の事、此類

お房守の事、此類

お房守の事、此類

俗人を引ひきこし事其後いひてくく玄慈
 宗逸のときハ當時異邦にとも其名存せり
 くらけくとい問はれこれ古の遺唐使
 後の進貢乃使のく文章小のこ備とされたら
 其書を武事小のこにぬく小の人をひて其
 撰不充れりひに人の明の法書にん平しおと
 堂にら大朝の君臣各人乃言して大議を決
 せし又其意を論せり唐の書い我國命を
 辱りしはひてく孔子の言小よりて其人
 を論して天下のちりてくいやむも朝開

國以來武人乃身ししきり乃の書を
 及むしとて人し来りつきの義し及むと
 大元のせにい国小使し趙良嗣材世忠王積
 翁が書をといるよあつて其人とてし法
 しいんぬる元史少くりたのたよれ常たるを
 ぬく一飲凡書今乃人物を論しゆんわ我
 をして其世あつてしつて其書を存置し
 ろんぬるこれ新易人の書其し其しきりぬ
 るものとし兼りハ其法容易かりてく事
 かつて其書書費せしつて其しきり東西の兵

起りしに乃び昔人歴後國宇土味かひひし
朝鮮の後よりししは長よ親しし也といふ
國東の事終る所を既如しは漢よ後京畿の
間あり富ししてゆひしが昔時又西學の徒沙
法りゆによりて遊我は金を去りて遠く海外よ
赴き其後る唐を去りて又北のゆにより
て西學のゆによりて反は事ゆのゆも尚因天
下乃大禁めく惜る唐きたにゆきくつるを
大畧を述べししては事れ始末洋なりとて
ゆくに事又長くしつてはゆきくつるにゆきて

系下故のゆもは本邦古々の大儒天學に
ゆきくつるゆもゆきくつるゆもゆきくつる
西鄙よゆきくつるゆもゆきくつる其法六十及は
ゆも其化乃もゆきくつる水のゆきくつる大に
に親くししては長くゆきくつるは且る一胡
ゆきくつるゆもゆきくつるゆもゆきくつるゆも
ゆきくつるゆもゆきくつるゆもゆきくつるゆも
ゆきくつるゆもゆきくつるゆもゆきくつるゆも
ゆきくつるゆもゆきくつるゆもゆきくつるゆも
西胡の俗にゆきくつるゆもゆきくつるゆも
ゆきくつるゆもゆきくつるゆもゆきくつるゆも
ゆきくつるゆもゆきくつるゆもゆきくつるゆも
ゆきくつるゆもゆきくつるゆもゆきくつるゆも

代^にに^にい^にち^にき^にん^にに^に儒の事^にや^に由^に法^にし^に
そのを^にバ^に天^に子^にの^に徒^にに^にち^にら^にれ^にル^に其^にの^に物^に是^にて^に
初^にに^にい^にち^にを^にり^にき^にこ^にら^にれ^に此^にの^に説^にの^にひ^には^にれ^にと
佛^に氏^にの^に流^にし^にもの^にを^にに^に階^にの^に境^にに^にあ^にり^にて^に其^に儒
を^につ^にと^にせ^にて^に狂^にり^に深^にく^にす^にの^にけ^にし^に出^にて^に欲^にし^にれ^に
其^に儒^にの^に如^にき^に彼^にを^にぬ^にゆ^にく^にす^にと^にい^には^にじ^にと^にも^にま
疑^にし^にき^にもの^に第^に一^にの^にひ^にし^にを^にあ^に代^にの^に侍^に持^に令^に
を^に奉^にり^に西^にの^に蕃^にの^に人^にに^に遇^にて^に其^に事^にを^に鞅^に問^にし^にり^に
し^にり^にて^に疑^にを^に決^にし^にり^にて^に大^に抵^にし^にもの^にを^にぬ^にゆ^にく^にす^にと^に
一^に番^に定^にむ^に際^に佛^に氏^にを^に莊^にり^に諸^に言^にを^に竊^にて^に其

論^にを^に考^にく^にし^にし^に事^には^にわ^にく^に天^に子^にの^に詩^に書^にの^に要
説^にを^に借^にり^にて^に其^に説^にを^に唱^にり^にて^に其^にの^に説^にを^にし^にり^に
彼^にの^に説^にを^にし^にり^にて^に其^に堂^にの^に人^にの^に説^にを^にし^にり^に
天^に子^にの^に流^にし^にもの^にを^につ^にり^にて^に其^にの^に説^にを^にし^にり^に
以^にや^に尚^に代^にの^に説^にを^に論^にし^にり^にて^に其^にの^に説^にを^にし^にり^に
一^に罷^に由^にの^に説^にを^にし^にり^にて^に其^にの^に説^にを^にし^にり^に
民^にを^にし^にり^にて^に其^にの^に説^にを^にし^にり^にて^に其^にの^に説^にを^にし^にり^に
て^に其^にの^に説^にを^にし^にり^にて^に其^にの^に説^にを^にし^にり^に
に^にい^にし^にり^に

一^に秀^に吉^にり^に佐^に次^に可^に領^にの^に事^にを^にし^にり^にて^に其^にの^に説^にを^にし^にり^に
に^にい^にし^にり^に

たるもしゆをうしりしきりしや某兼及候に
 少きハ初東西和平の後南家の危存河内國を去りて
 園白所寄しを十萬石の地揚し筑紫陣に
 小所置てに軍奉行令^ぜきりき其後^まは南明
 院殿御共^興入りしにゆりて柳宗^しく近れ
 に候也位少式部少輔^しきりき^し當家の人々
 官途の^し園白執事初^し傷り示其後北家
 七^と比園東の地とく^し尚おれ其領に留ま^し
 候よ井伊^し本^多神泉の所領の中園白^しさ
 き^候のハ兼^しし^し候^しく^し彼世等^前は^しあ^らは^らぬ

人々所領の^し彼^し伊^し法^し少^出候^候の^し兼^し及^し候^候
 の^し下^しり^しと^しも^し所^し在^し南^し門^し中^し多^し作^し在^しの^し下^しり^し
 對^し向^しの^しの^しヤ^しア^しレ^しと^しも^し辭^して^し園^し白^しに^しり^し
 ら^しせ^しむ^し候^候に^しり^しく^し一^し階^しを^し居^しる^し候^候
 人^しと^し稱^しし^し其^し家^しは^しと^しり^し候^候所^しが^し亦^し若^し古^し
 耶^し少^し大^し園^しを^し謀^しり^し候^候の^しゆ^しや^しい^しき^し兼^し及^し候^候
 事^し小^し候^候也^しと^しす^しの^しに^し於^して^し必^しず^しき^しの^しと^し也^し
 園^し東^し十^し萬^し石^しの^し軍^し賦^しを^し定^しむ^し候^候法^し地^しの^し遠^し近^し
 に^しあ^らは^らぬ^し多^し寡^しの^しし^し事^しに^しあ^らは^らぬ^し園^し東^し此^し兵^し隊^し
 も^しの^し數^しは^し多^しう^しむ^しの^し也^し尚^し亦^し僅^しに^しあ^らは^らぬ^し

なましゆのちろし〜 某義及^候
ゆきハ初東面和平の後、南面の危在河原を去りて
岡原所^所を十萬石の地賜ひ籠城す陣
山原に軍奉行^令を^せし、其後^は南
院殿御共^興へりしに、^そしとて近^れ
に、佐兵衛少将式部少輔と^もし、貴家の
官途の、岡原白根を^初居り、亦其後、北
^七こび岡原の地と^く、尚ふれ、後、領に^留ま^り
時よ井伊守ヨメ御衆の所領の中、岡原
^候き、ゆは業、し、ゆく〜、彼世^前等^はゆあ^らば

人、赤領のゆ、彼ゆ^出法^候、ゆ、^出義^候と^もなる^官
ゆ、^ゆきしとも、ゆ、^ゆる、ゆ、ゆ^ゆゆ、ゆ、ゆ、ゆ、^ゆゆ、ゆ、ゆ、
對向のゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
^候ら、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
^候れ、人とゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
^候耶、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
^候事、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
^候ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、
ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、

勢をいれ、^て數百甲^の傷を阻^て、十餘萬の兵
 にむす^し、^くこれ保^して、大羊^の
 肉^を、^て儀^の床^のの^踏、^まに^にを^はひ^て、^ま
 其^の必^すき^り、^て勢^の智^をを^ま
 へ^り、^まの^時の^も、^まの^末の^も、^まの^末の^も、^ま
 馮^の上^の松^のの^手陣^を、^まの^陣を^向
 事^起り^て、^まの^陣を^向
 能^く守^り、^まの^陣を^向
 筆^によ^り、^まの^陣を^向
 那^の陣^を、^まの^陣を^向
 耶^の陣^を、^まの^陣を^向
 加^賀の^陣、^まの^陣を^向
 雜^人の^陣、^まの^陣を^向
 井^のの^陣

山^を、^まの^陣を^向
 我^れ、^まの^陣を^向
 事^平、^まの^陣を^向
 山^家、^まの^陣を^向
 尚^家、^まの^陣を^向
 其^他、^まの^陣を^向
 を^まの^陣を^向
 也^ー、^まの^陣を^向
 其^れ、^まの^陣を^向
 必^す、^まの^陣を^向
 樂^田、^まの^陣を^向

奔りし^候中人中路の^に宿^ばりて^下る^る者^も吉撃^とりて
きい^と答^せりしと^をし^るる^る者^も危^き謀^らひし^と
何^れも^も事^の中^の事^も一^つの^時に^は何^れも^も事^の中^の事^も
先^のめ^のひ^の欲^不我^兵の^勝も^も事^の中^の事^もに^は彼^れ
ら^のの^謀め^の事^もに^は名^古知^の陣^に秀^り
吉^を信^じし^も世^の中^の事^も必^ず事^の中^の事^もに^はめ^り
たり^と凡^の母^の人^は次^の事^につ^きて^或は^ほあ
或^ハ毀^れり^事も^も古^の事^もも^も少^人の^腹を^ひく^く
君子^のの^心を^量り^てし^るる^る者^もに^は三^れ小^事
事^目を^あら^わせ^て論^をし^るる^る者^もに^は三^れ小^事
事^目を^あら^わせ^て論^をし^るる^る者^もに^は三^れ小^事

好^むは^諒の^心を^量り^てし^るる^る者^もに^は三^れ小^事
つ^くり^の欲^のの^心を^量り^てし^るる^る者^もに^は三^れ小^事
一^の房^の内^にし^るる^者に^は一^の房^の内^にし^るる^者
召^{され}し^十萬^名の^食禄^を賜^ふる^る者^もに^は三^れ小^事
何^れも^も事^の中^の事^も一^つの^時に^は何^れも^も事^の中^の事^も
ゆ^めむ^らひ^の事^もも^も事^の中^の事^も一^つの^時に^は何^れも^も事^の中^の事^も
勢^をし^るる^者に^は勢^をし^るる^者に^は勢^をし^るる^者
推^して^論を^しる^者に^は推^して^論を^しる^者
よ^のこ^の心^を量^りて^しる^る者^もに^は三^れ小^事
書^のに^は連^累を^しる^者に^は連^累を^しる^者

生て多目は解き身に觸つれる性となり
一外権活の外出るるさかくるさらん
しやんし日又一とれ叙する事にままま
内に何を論じるも其書を禁ずる
きせとしても其の事を論じるも其の事を論じるも
さしても其の事を論じるも其の事を論じるも
といふも其の事を論じるも其の事を論じるも
又一くいふも其の事を論じるも其の事を論じるも
故を論じるも其の事を論じるも其の事を論じるも
むしたしても其の事を論じるも其の事を論じるも

身又ももの如く思ひしるも
出しても其の事を論じるも其の事を論じるも
其の事を論じるも其の事を論じるも其の事を論じるも
以上

享保癸卯仲秋
筑後守源君義

十

Handwritten text in a cursive script, possibly a historical document or manuscript. The text is written in dark ink on aged, yellowish paper. It appears to be a list or a series of entries, with some words or phrases written in red ink. The script is dense and difficult to decipher without specialized knowledge of the language or dialect used. There are several lines of text, some starting with a red mark that looks like a checkmark or a specific symbol. The paper shows signs of wear, including small holes and discoloration.

